

「カオスの中でのアイデンティティーの確立」

—ある一人の男の生き方—

山口 和範

米ソ両超大国による冷戦が終結し、世界は今、恒久的な平和に向けて新たな秩序を模索している。

わが国においても、1955年の保守合同に始まる自民党の一党支配時代が終わり、連立政権が誕生して、政治の世界に新しい風を吹き込んだ。また、今日に至っては、さらなる政界再編成の波が永田町全体を覆っている。

このような気運の中で、我々の価値観も世紀末を迎えるにあたり、急速な勢いで変化することを迫られている。つまりは、55年体制下での悪弊たる旧態依然としたパラダイムの撤廃がさまざまな局面で生じている。男社会から男女平等社会へ、組織中心から個人中心へとといったものがその典型として挙げられよう。こうしたことは歓迎すべきことではある。しかし、このように混沌として流動化している社会に連れられて、我々自身も世間の潮流に全てが全て流され放しになってはいないだろうか。「バスに乗り遅れるな」として自分自身を見失いかけてはいないだろうか。

私はこれまでに数多くの人と出会ってきたが、その中で、何の目的意識も持たずにただ生きていく人が多いという現状に驚かされた。これはいわゆる「若者文化」として嘲笑に附される現代の若者の共通項といえることかも知れない。そこで私は、そのような人を見るつけ問うことがある。

—何のために生きていくのか—

これは我々に課せられた永遠の難題でもあるように思われる。故に、問われた方としては答えに躊躇する人が多い。また、答えを出すにしても「それを見つけ出すために生きていく」といった逃げの回答や、「愛する人のために生きていく」といった恋愛至上主義者特有の無目的的回答などである。このようなことから、人は一般に、そんな堅苦しいことを考えず、また、必ず直面するであろう「死」ということも意識せず、ただ坦々と生きていく、といった姿が伺われる。しかし、こうして何の目的も持たずに普通に生活し、普通に生き、そして普通に死んでいくといったアベレージな生き方で、果たして納得のいく人生を送ることができるだろうか。そのように生きて果たして満足するに値するものを生み出せるだろうか。確かに、どう生きようと個人の勝手であるが、少なくとも私は、それだけでは飽き足りないと思う。

私がこの問いに出くわしたのは、大学1年の時であった。それまでは部活、受験といった打ち込めるものがあつたが故にこのようなことを考える余裕がなかった。いや、むしろ、考えずに済んだといった方が良いかも知れない。しかし、大学に入学し、何も燃えるものがなくなり、目的を見失って、いわゆる

「5月病」の長期版に陥った。「俺は何のために生きていくんだ」このことが常に私の脳裏に焼き付いて離れなかった。私はこの地球から脱却したいがためにいろいろなものに手を出してはみたが、どれもしっくり来なかった。そんななか、自分の将来を見定めた時、ある一つのキーワードが存在した、一夢（野望）—。幼い頃から「夢は大きく」持って生きてきたが、その夢を実現させるべく、行動していく時宜が今まさにやって来ていることに気づいた。

夢を持つことは誰にでもできる。しかし、それを実現できることは希である。ただし、実現した暁には、その夢はPOWERと化す。

私は「夢（野望）」のために生きるという結論に達した。また「夢のために生きる」というのが先の問いの抽象的かつ普遍的な回答にもなり得ると考える。そして、夢を追うことで、輝いた自分を演出できるものと信じた。

確かに、「夢」というのだから、実現までの道程は遠いものとなるかも知れない。それまでには多大な苦勞も生じることとなるだろう。故に、挫折して夢を夢のまま保存しておく者も数多く存在する。

しかし、実現しない夢は持つに足りない。今の日本の経済を「バブル経済からストック経済への移行期」と評したのは長谷川慶太郎であるが、このような夢に向かっただのストック（過程）を経ることにより、それが実現した時の喜びは大きなものとなるに違いない。そして、これがPOWERを創出して、そこに一段と成長した自分を見出すことができよう。

ところで、このような「夢のために生きる」というのは、一見、普遍的であるように思われても、ある意味では古く、今の時代にそぐわないものとなっているかも知れない。なぜなら、現代人は、楽しく生きることには主眼を置く傾向にあるので、そのような夢へのストック（過程）を惜しみ、（将来の）夢よりも現在の楽しさを嗜好し、成り行きに身を任せられた方が合理的と考えるからである。先にも述べたように、社会の流動化に伴う様々な価値観の変化の中にある今日において、旧来の価値観とは異なる視点からの現代的価値観が有効となる場合が多い。故に、人は、そうした変化に敏感に対応する。その結果行き着くところは皆が並列的なアベレージな生き方ということになる。これは安全性を備えているともいえる。

しかし、これでは個性は育たない。このように現代の社会は個を重視する傾向にありながらも、価値観の同一方向的流動化に伴い、個が埋没するといったパラドックスを生ずる危険性ははらんでいるのである。また、旧来の価値観といえども、社会の変革ムードに乗って安易に切り捨てるべきでないものも存在する。

したがって、私は、「夢のために生きる」という信念を大切にしたい。これが現代社会にとって異端児に映るとしても、このようなアイデンティティーは、混沌とした社会であるからこそ要求されるものと考えたい。そして漱石の「精神的向上心のない者は馬鹿だ」を論拠として、カオスの中で私のアイデンティティーを確立させたいと考えるのである。

私は、この春大学を卒業する。日本の大学の墮落が叫ばれて久しいが、私には、大学時代がこのようなことを考えさせるゆとりを与えてくれた点で、有意義なモラトリアムであったように思われる。

最後に、ドイツの詩人シラーの言葉を借りて、Self最終号における私の文章の締めをしたい。

「青春の夢に忠実であれ」